

サファヴィー朝年代記と トルコ暦（十二支）の導入

後 藤 裕 加 子

は じ め に

- I 行政文書における十二支年の使用
 - II サファヴィー朝年代記へのトルコ暦の導入と叙述形式の変遷
 - 1) タフマースプ時代の年代記とトルコ暦の導入
 - 2) アッバース1世時代の年代記
 - 3) サフィー1世時代以降
 - III サファヴィー朝の年代記作家たち
- お わ り に

は じ め に

西暦13世紀に広大な領域を支配したモンゴルは、諸地域の社会や文化に大きな影響を及ぼした。イスラームが優勢であったイラン北西部を中心とした地域でも、イル・ハーン朝の支配が約百年にわたり続いたことで、さまざまな非イスラーム的要素が持ち込まれた。

このような例のひとつに、サファヴィー朝の年代記でトルコ暦 (sāl-i turkī) と称される、十二支に基づく暦の導入がある。イスラームではマディーナへの遷都が行われた西暦622年を元年とする太陰暦のヒジュラ暦を採用し、歴史叙述や文書などの公的な書類は全てヒジュラ暦で記録された。イル・ハーン朝の支配領域は、同地域定住民の主要言語ペルシア語の文化圏と大きく重なり、この地域ではすでにイスラームの学術用語であるアラビア語に代わり、ペルシア語による歴史叙述の伝統が確立されていたが、この歴史叙述においても諸事件はひき続きヒジュラ暦で記録された。しかし、世界史『集史』など、イル・

ハーン朝のいくつかの年代記では、ハーンの即位などモンゴル政治史に関わる重要な事件の日付の記録に、ヒジュラ暦と併用して十二支（ウイグル暦）の使用が認められる⁽¹⁾。

イル・ハーン朝時代の歴史叙述における十二支の使用を研究した Melville (1994) によれば、イル・ハーン朝時代の歴史叙述にウイグル暦が導入されたのは、そもそもモンゴル帝国中心部で中国起源の暦を正式な暦として使用していたからである。中央部での主要な諸事件は十二支で記録、または口伝されたので、ヒジュラ暦で年代を区分し、叙述するペルシア語の世界史叙述の一部として「モンゴル史」を組み込むために、十二支の日付をヒジュラ暦に換算し、双方を併記する必要があった⁽²⁾。

イル・ハーン朝の滅亡により、ペルシア語歴史叙述において、諸事件を十二支で記録するという慣行は下火になる。そもそもペルシア語歴史叙述にはアラビア語歴史叙述のような厳格な編年形式への志向はなく (Melville (2004), 349), 15世紀末までにヒジュラ暦の編年形式で著された歴史書の数も多くはない⁽³⁾。だが、イル・ハーン朝の支配の中心地アゼルバイジャン地方を足場に、16世紀初めに統一政権を樹立したサファヴィー朝の時代、十二支年（トルコ暦）を使用した編年形式の歴史叙述が行われるようになる。そしてヒジュラ暦との併記は保持しつつ、トルコ暦優先の編年の歴史叙述形式が主流となっていく。

サファヴィー朝時代のトルコ暦の特徴は、十二支年を使用するという点と、ウイグル暦の年始とのずれの2点が挙げられる。つまり、モンゴル時代には立

(1) 欧米の研究は、ウイグル経由で導入されたモンゴル時代の十二支暦を Chinese-Uighur calendar と呼ぶ。本稿ではサファヴィー朝時代のトルコ暦と区別するため、これをウイグル暦とする。

(2) Melville はイル・ハーン朝の支配者が天文学を支援し、暦法の発展に寄与したことや、ウイグル暦とヒジュラ暦の換算に使用する天文表 (zīj) の存在を強調している。『集史』における十二支の使用は「モンゴル史」と「イル・ハーン朝史」の約80例に限られるが、Melville はウイグル暦をヒジュラ暦に換算した例において換算が概ね正しい一方で、もともとヒジュラ暦で記録された出来事が十二支年に逆換算された場合（その場合、ヒジュラ暦が十二支年より先に記載される）には、換算にしばしば間違いがあることも指摘している。

(3) イル・ハーン朝時代の歴史書のうち、ヒジュラ暦編年形式を採用し、かつ十二支年を併記した年代記は『ウルジャイトゥ史』のみである (cf. Melville (2004), Table 1)。

春（1月下旬から2月上旬頃）にあった十二支年の元旦が、ペルシアの土着の文化と折衷し、春分の日にあたるノウルーズを元旦とする独自の暦法へと変化した⁽⁴⁾。Melville はティムール朝年代記の記述から、14世紀末までにウイグル暦の元旦がノウルーズの日になっていたとし、恐らくはイル・ハーン朝時代の701（1302）年にノウルーズを元旦とする太陽暦のハーン暦が導入されたことが、ノウルーズがトルコ暦の新年元旦となる契機となったとする（Melville (1994), 93）⁽⁵⁾。しかし、ハーン暦を使用した現存文書は、ほぼ14世紀半ばすぎまでの数例に限られる上、ハーン暦での年数のみが記載され、十二支年や月名の記載はない⁽⁶⁾。ハーン暦の導入がノウルーズを元旦とする暦の使用の契機になった可能性は高いが、ハーン暦と十二支年との関係は確認できないままである。第3章での引用にもみられるように、トルコ暦は別名ジャラーリー暦とも称される。セルジューク朝時代に制定された、ノウルーズを年始とする太陽太陰暦ジャラーリー暦と十二支年が直接結びついた可能性も否定できない。いずれにせよ、Melville が言及しているように、立春の日に新年を祝う慣行も残っていたティムール朝時代は、立春始まり、ノウルーズ始まりのふたつの暦法が複雑に共存する、過渡期だったといえよう。

著者は別稿において、サファヴィー朝が中央集権化を目指す過程で、王権をアピールする手段のひとつとして、第2代タフマースプ時代後期にペルシア起源のノウルーズの祝祭を宮廷行事として催すようになったことを検証した。また、そのなかで年代記などの歴史叙述が、ノウルーズを元旦とする十二支年で見出しを立てた編年形式を採用するようになっていったことについても指摘し

(4) 太陰太陽暦の中国の暦では、元旦は太陽が黄経315度にある日（立春）で、13-14世紀にはユリウス暦1月下旬、1396年は2月10日にあたった（Melville (1994), 84, 97）。

(5) Melville によればハーン暦は財務上の問題を解決するためにガザンの改革のひとつとして導入された暦で、ノウルーズに始まり、トルコ語の月名を持つという（cf. Herrmann (2004), 104）。Hamd Allāh Mustaufi, 1415の記述によれば、財務のみでなく、任免、解任なども新暦での処理が意図された。

(6) ハーン暦を使用した現存文書例は、Herrmann (2004), X, XI, XVII, XIX, XXIV。ハーン暦の記載は文書のテキスト内のみで、文書の発行日はヒジュラ暦に基づく。ハーン暦と十二支年が併記された現存文書は、ほぼ一世紀後のカラ・コユンル朝時代の859（1455）年の一例に限られる（表1参照）。

た。

200年を越えるサファヴィー朝時代には数多くの年代記が書かれ、主要な年代記作家やその著作については個別の研究が豊富に存在する。また近年では先行王朝の歴史叙述の伝統との連続性と独自性を明らかにした Quinn (2000) の研究があるが、サファヴィー朝の歴史叙述における十二支年（トルコ暦）の導入については、McChesney (1980) が『アッパース大帝史』のトルコ暦について個別に論じた以外、その重要性について指摘し、総合的に考察した研究はない。本稿ではノウルーズを元旦とするトルコ暦が公的な暦法としてサファヴィー朝で使われるようになっていくまでの経緯、またその歴史叙述への導入の意図や担い手について明らかにすることを目的としている。

I 行政文書における十二支年の使用

暦法改革は社会制度の諸分野に影響を及ぼす。宮廷行事としてのノウルーズの導入におけるサファヴィー朝とムガル朝の類似性については別稿ですでに指摘したが、ムガル朝の場合、暦をめぐる第3代アクバルの改革は一時に行われ、起源や変更点が明確である。

アクバルは兄弟の反乱を平定した後の1582年に戦勝祝いとしてノウルーズの祝祭を開催し、第6代アウラングゼーブが異教の儀礼との理由でこれを廃止するまで重要な宮廷行事であった。2年後の1584年にはノウルーズを元旦とするイラーヒー暦が採用され、1556年のアクバルの即位年にまで遡って適用された。イラーヒー暦の使用は『アクバル大帝史』(*Akbar-nāmah*)などの年代記の編年体の叙述形式のみならず、文書の発行日、貨幣の鑄造年月にまで及んだ。年は各皇帝の即位年を元年とする統治年数 (*julūs*) で表示され、ペルシア風の月名が使用された。第5代シャー・ジャハーンは即位2年目に暦法をヒジュラ暦に戻したが、ペルシア語の月名の使用は認めたという (近藤, 335)⁽⁷⁾。

(7) 貨幣にイラーヒー暦が導入されるのは、アクバルの治世30年目の993年（西暦1585年）のことである。貨幣の場合、第4代ジャハーンギールは治世年とペルシア月の使用は継続するが、即位の初年からヒジュラ暦の刻印が復活する。ペルシア月

ムガル朝では文書行政、貨幣鑄造、歴史叙述にイラーヒー暦が採用されたが、サファヴィー朝ではどうであったのか。まずは文書史料から十二支年の適用状況を検討していく。

表1はサファヴィー朝の初代イスマーイール1世から第3代アッバース1世時代までの、現存する勅令、書簡やワクフ文書などの諸文書で刊行されているもののなかで、十二支年が使用されているものを表にしたものである⁽⁸⁾。サファヴィー朝の先行王朝についても適宜、表に含めた。表では文書が発行された順に、発行年月日、本文中にあらわれる勅令の発効の日付、発布者、冒頭の定型句、文書の内容を提示した。

この表からわかる通り、すでにティムール朝時代の14世紀後半において、イラン北西部では文書の発効の日付として十二支年が使用されている⁽⁹⁾。これは後継王朝であるカラ・コユンル朝、アク・コユンル朝、さらにはサファヴィー朝へと引き継がれて行く。紙幅の都合から表にはないが、サフィー1世時代以降も文書における十二支年の使用はほぼ同じ傾向を維持する。イル・ハーン朝時代に作成された現存する文書のなかで、十二支年は外交文書に使用されているのに対して (Melville (1994), 94), サファヴィー朝の外交文書にはその例はな

名の使用が停止されるのはアウラングゼーブ時代のことであるが、同帝時代にも統治年の刻印は続けられた (Rodgers (1972) 参照)。

(8) この表は現存するイランの諸王朝の勅令で1980年までに刊行されたものを整理した Fragner の研究、そのうちサファヴィー朝の勅令に特化し、定型句や文書の内容など、より詳細な分類を行った Schimkoreit の研究に基づく。これに2006年までに刊行された文書史料やインシャー手引書から十二支を使用している事例を加えた。Fragner, Schimkoreit の両氏には十二支の使用という観点はなく、文書の発行年にはヒジュラ暦と西暦に換算した日付しか記載されていない。また、文書の本文中の十二支の発効年について必ずしも言及されていない事例もある。筆者は紹介されている文書、特に本論文の考察対象期間であるアッバース1世時代前期までについては、数例を除いて全て現物を確認したが、未見文書の本文中に十二支が使用されている例が残されている可能性はある。

(9) ティムール朝の文書としては、シャルフ時代の825 (1422) 年のソユールガル授与文書の発行日にヒジュラ暦の年月日と十二支年 (丑年) が併記されている (Deny (1957))。これはアフガニスタンの仏教僧に宛て、その家屋と付随する不動産がムスリムにソユールガルとして授与されることを通達した、ウイグル文字で書かれたチャガタイ語文書で、特殊な事例といえる。798 (1396) 年の文書もティムール朝時代とはいえ、イラン北西部のアゼルバイジャン地方で作成された文書であり、ティムール朝下では十二支の使用はむしろ例外的なものようである。

表1 十二支年が記載された文書

発行年	発効年	発布者（定型句）：文書の内容（地域）	典拠
798.Ram.27	子年初(798)	Mīrān Šāh-S：ソユールガール授与 (Nahjāwān)	Fekete, 1
857.Ram.13	酉年初(857)	Jahān Šāh：ソユールガール授与	Busse, 1
859.Raj.3	辰年初(853) =hānī 159 巳年初(854)	Jahān Šāh：ソユールガール授与(Fārs 地方)	Aubin, 159-162
875.Z.Q.4	卯年初(875)	Uzun Ḥasan-S：ソユールガール授与	Busse, 2
877.Z.H.1	巳年初(877)	Uzun Ḥasan-S：職人への報酬支払い	Fekete, 20
917.Muh.	辰年初(913)	Ismā'il I：ソユールガール授与(Jām)	Ismā'il, 101-103
920.R.I.20		Ismā'il I：聖廟の管理人の任命 (Qum) 文書の裏面にトユールの発効日（申年=918. R.I.） ソユールガールの発効日（戌年（920））	Turbat, 56 (23)
923.Muh.18	子年(922)と 亥年(921)	Ismā'il I-S：家畜税の支払いについて (Ardabīl)	Herrmann (1986), 289-290
927.R.I.14	戌年初(920)～ 辰年末(927)	Ismā'il I-S：ソユールガールの確認 (Tabriz)	Herrmann (1986), 293-294
928.Raj.1	午年初(928)	Ismā'il I-S：ソユールガール相続承認 (Astarābād) (Hermann (1986), 289によれば Sām Mirzā の勅令)	Āstārā, 2 (27)
931.Šw.18		Ismā'il I-S：聖廟の管理人の確認 (Qum) 文書裏面にソユールガールの発効日（卯年 (925)）	Turbat, 57 (30)
932.Raj.27	申年初(930)	Ṭahmāsb：雑税の減税 (Kāšān)	Ṭahmāsb, 508-9
938.R.I.18	卯年初(937)	Ismā 'il Iの妻：廟へのワクフに関する勅令 (Qazwīn)	Bargī, 7
938.Šw.	辰年初(938)	Ṭahmāsb-S：ソユールガール相続承認 (Astarābād)	Āstārā, 4 (34)
943.R.I.30	申年(942)	Ṭahmāsb-S：ザーヴィヤの管理人の任命（免 税について）(Rayy)	Dāniš-pažūh, 144-145 (40)
(～951.J.I.)	卯年Hamal 初 (949末-950初)	Ṭahmāsb-FHŠNY：Humāyūn のヘラート受け 入れ準備	Ṭahmāsb, 53-61
950.Z.H.	辰年初(950)	Ṭahmāsb-FHŠ：貧者へパン給食配布の指示 (Astarābād)	Āstārā, 3 (49)
954.R.II.20	未年初(954)	Ṭahmāsb-FHŠ：ソユールガール相続承認 (Astarābād)	Āstārā, 9 (55)
955.R.I.	辰年(950末- 951)	Ṭahmāsb-FHŠ：ソユールガール加増通達 (Astarābād)	Āstārā, 10 (56)
956.R.II.3	酉年初(956)	Ṭahmāsb-S：ハーキム任命とトユール授与 (Luristān)	Fekete, 69 (59)
958.Raj.	戌年初(957)	Ṭahmāsb：雑税の減税 (Širāz)	Sefatgol, 7
963.Muh.	卯年初(962)	Ṭahmāsb-FHŠ：聖廟の管理人の任命 (Bakū)	Schimkoreit, 68

966.R.I./午年		Ṭahmāsb-FHŠ : 農民への適切な徴税指示 (Sīstān)	Dā'ūdī, 1 (70)
969.Raj./戌年		Ṭahmāsb-FHŠ : mulk 地と住民の権利確認 (Qarā Kilīsyā近郊)	Papazjan, 16 (72)
970.R.I./戌年		Ṭahmāsb-FHŠ : アルメニア教会のサドル位とワクフ地承認	Papazjan, 17 (73)
972.J.II./子年		Ṭahmāsb-FHŠ : 聖廟の管理人への指示 (Qum)	Busse, 8 (75)
972.Šw.13/丑年	(丑年年始) (972.Šb)	Ṭahmāsb-FHŠNY : 商税廃止 (Tabriz)	Ṭahmāsb, 22-23 (77)
972.Ram.下旬/ 丑年	972.Šb.12= 丑年	Ṭahmāsb-FHŠNY : 造幣所へタムガ税徴収の違法通達 (Nahjawān)	Horst(1961), 1 (76)
973.R.I.13/丑年	丑年初(972)	Ṭahmāsb-FHŠNY : ワクフの管理に関する指示 (Ardabīl)	Fragner (1975), 2 (78)
975.Šaf.27	寅年/974.Muḥ.	Ṭahmāsb-FHŠNY : Ḥān Ahmad Ḥān との協議 本文中に前回の使節派遣の日付	Ṭahmāsb, 118-126
977.Z.Q.13/ 午年		Ṭahmāsb-S : アルメニア教会司教の位と権利確認	Papazjan, 18 (81)
979.Ram.10/ 未年	申年初(930)	Ṭahmāsb-FHŠNY : 以前の勅令 (雑税減税) 確認 (Kašān)	Ṭahmāsb, 510
979.Ram.10/ 未年	申年初(979)	Ṭahmāsb : 家畜税の減税 (Hamadān)	Gulzādī, 2
981.Muḥ.2/ 酉年	酉年初(980)	Ṭahmāsb-FHŠ : 石鹼工場の閉鎖 (Kašān)	Ṭahmāsb, 511-2
(981.Muḥ.2)	981.Muḥ.2 =酉年初	Ṭahmāsb-(FHŠ) : 石鹼工場の閉鎖 (Fārs)	Iqtidārī, 319-322 (82)
984.Z.Q.12/ 子年		Ismā'īl II-amr : カーディー・アスカル位とアルメニア正教徒の村の権利確認	Papazjan, 19 (92)
(985).Raj.12/ 丑年		Ismā'īl II : Ḥān Ahmad Ḥān 宛の書簡	Ṭahmāsb, 135-7
986.R.II.1/寅年		MḤ-FHŠ : ハリーファ職任命 (Qazwīn)	Bargī, 13
986.R.II./寅年	寅年初(986)	MḤ-FHŠ : 教授の年金授与 (Iṣfahān)	Busse, 9 (93)
987.Raj./卯年		MḤ-FHŠ : ソユールガールの遺産配分保証 (Ardabīl)	Fragner (1975), 3 (94)
989.R.II./巳年	辰年初(988)	MḤ-S : ソユールガール相続承認 (Fārs)	Horst (1955), 290-2(95)
990.Šb.	申年初(992)	MḤ-FHŠNY : ソユールガール授与 (Astarābād)	Āstārā, <1>(96)
992.R.II.	寅年(986)	MḤ-FHŠ : ソユールガール確認 (Ardabīl)	Martin, 5 (97)

994.Muh.	寅年(986)	‘Abbās-FHŠ : アルメニア教会への課税間違い通知	Papazjan, 22 (98)
996.Šw.	子年初 (996.R.II.)	‘Abbās-FHŠ : ソユールガール承認 (Astarābād)	Āstārā, <3>
996.Z.Q./子年	子年 6 月 (996.Ram.)	‘Abbās-(S) : ソユールガール授与 (Astarābād)	Āstārā, 11(102)
999.Raj.	戌年初(997)	‘Abbās-FHŠNY : jhāt 税の免税通知(Ṭāliqān)	Mīr Abū al-Qāsimī, 271-2 (84)
1002.J.I.1	巳年 6 月初 (1001-2)	カルトリの支配者シモンの勅令-S	Papazjan, 23
1010.Šw.	午年(1002-3)	‘Abbās-FHŠ : 寅年初(1010)からのトユール相続承認 (Ṭāliqān)	Mīr Abū al-Qāsimī, 270-1 (110)
1011.Farwardin. 1(卯年)		‘Abbās : ムガル朝王子 Dāniyāl からの書簡	‘Abbās, III, 375-380
1013.Z.H.	巳年初(1013)	‘Abbās-FHŠ : 某アルメニア人への戦功の報償	Mufahham, 4 (117)
1016.Muh.	子年初(1008) = 1009	‘Abbās-FHŠ : ソユールガール再承認 (Ardabīl)	Martin, 7 (125)
1016.J.I.	未年 3 月 (1016.Muh.)	‘Abbās-FHŠ : キリスト教聖職者 malik 任命 (Qarābāg)	Schimkoreit, 129
1023.J.I	寅年(1023-4)	‘Abbās-FHŠ : ソユールガール登録確認 (Mašhad)	Simsār, 83 (145)
1024	卯年初(1024)	‘Abbās-HJŠ : シーア派市民の Ram. 月 mālūjhāt 免税 (Bakū)	Schimkoreit, 148
1026.R.II.	巳年初(1026)	‘Abbās-FHŠ : アルメニア正教司教の位と権利確認	Papazjan, II, 12 (151)
1026.	卯年初(1024)	‘Abbās-HJŠ : シーア派市民の Ram. 月の免税 (Hamadān)	Gulzādī, 3
1029.Šaf.	子年初(1033)	‘Abbās-FHŠ : 某グルジア人の息子たちの権利相続確認	Schimkoreit, 155
1036.Ram.	子年初(1033)	‘Abbās-FHŠ : ソユールガール相続承認 (Astarābād)	Āstārā, 16 (165)
1036.Z.Q.	丑年(1034-5)	‘Abbās : ある書記への丑年の年金の通知	Afšār(1346), 184

* 発効年の十二支年の後の括弧内の数字はその年のノウルーズがあるヒジュラ暦年

* 典拠の単独数字は979.Ram.10 (Kašān)と1023.J.Iの勅令を除いて出典での文書番号

* 典拠末尾の括弧内の数字は、Schimkoreitの文書整理番号

* Schimkoreitの文書番号のみ記載のものは、現物を確認しなかったもの

付録 十二支年のトルコ名

子年=sicqān yıl

丑年=ūd yıl

寅年=bārs yıl

卯年=tawīsqān yıl

辰年=lüy yıl

巳年=yīlān yıl

午年=yünt yıl

未年=qūy yıl

申年=pīčīn yıl

酉年=taḥāqūy yıl

戌年=it yıl

亥年=tungūz yıl

く、一部の書簡での使用に限定される⁽¹⁰⁾。もっともサファヴィー朝下であれば、キリスト教徒居住地区やキリスト教徒宛の文書でも十二支年の使用が認められ、トルコ暦の使用はもっぱらサファヴィー朝支配領域内向けであったことがわかる。十二支の発効年は職位への任命文書にも使用されているが、ソユールガールの授与や各種雑税に関する通達など、主に税務に関わる文書に使用される。これは「○年初めから (az ibtidā-yi xx yīl)」という決まった言い回しからもわかるように、徴税などの財務が太陽太陰暦に基づいて行われていたからである。ただしペルシア語やトルコ語の月名が明記されることはまずなく、月が記載されるときは3月、7月など数字であらわされる。また、ヒジュラ暦の年月日が併記されることも少ない (Fragner (1999), 283)。

これらの文書は文書行政における十二支年の使用が、サファヴィー朝以前から行われていたことを明らかにするが、月名が記載されないため、「○年の始まり」がノウルーズに置かれていたかどうかはわからない。一方、ノウルーズそのものが古来地域社会に根づいた新年の行事であったことは、文書史料からも確認される。イル・ハーン朝の宰相ラシード・アッディーンは自ら執筆したワクフ文書のなかで、ノウルーズの日の特別な礼拝や給食を指示している (Hoffmann (2000), 321, 323)。アク・コユンル朝時代の勅令に現れ、サファヴィー朝時代の勅令に頻繁に登場する雑税の一種に、「祝祭とノウルーズの心付け (īdī wa naurūzī)」というものがある。これはノウルーズや宗教上の祝祭日に役人に提供される贈り物であったという (Minorsky, 951)⁽¹¹⁾。サファヴィー朝のイスマーイール1世もノウルーズを祝っていた (後藤 (2004), 38)。

しかし、表1からも明かなように、サファヴィー朝時代の文書本文中の十二支年に月日が記載されることはまれで、またヒジュラ暦の年が併記される事例も少なく、十二支年と勅令の発行年との間に隔たりがあることもある。表1

(10) インシャー手引書から引用した1011 (1063) 年のムガル朝からの書簡にペルシア月名が使用されているが、ムガル朝ではこの当時ペルシア月を使用していたので、ありえないことではない。

(11) 本文中の事例も Minorsky, 930。サファヴィー朝の勅令ではイスマーイール1世が⁹⁰⁷ (1501) 年に発布した勅令 (Schimkoreit, Nr.1/ Nahjawānī, 362-363) にすでに登場する。

の勅令のうち、恐らく950年、遅くとも951年までにタフマースプからホラーサーンのアミール宛てに出された勅令には、「卯年 *Ḥamal* 初めから」という語句が文中にある。*Ḥamal* は白羊宮を意味し、ペルシアの暦の最初の月、*Farwardīn* 月の別名である。これはペルシア風の月名が使用された最も早い例ではあるが、恐らくインシャー手引書に採録されたものであり、実際に原文が作成された時に月名が記載されたものかはわからない¹²⁾。969年 *Rajab* 月（ユリウス暦1562年3月7日以降）に発行されたタフマースプの勅令は、発行年月日に十二支年（戌年）が併記されている。戌年の始まりをノウルーズの日と仮定してヒジュラ暦に換算すると969年 *Rajab* 月4日で、十二支の元旦とノウルーズが一致することが実際に証明できる、数少なく、また最も早い文書の例である。

トルコ暦の新年の始まりとノウルーズが一致していることが確実なヒジュラ暦960年代後期からの一時期は、文書の様式に興味深い現象が観察される時期でもある。966（1558）年のタフマースプの勅令は、文末の発行年にヒジュラ暦の年月のみでなく、十二支年（午年）を併記している。このタフマースプ時代の後半からアッバース1世の即位2年目までの限定された期間、現存するほとんどの勅令にヒジュラ暦と十二支年が併記されている。

タフマースプはヒジュラ暦930年 *Rajab* 月（1524年5月）／申年に10歳で即位した（*Denkwürdigkeiten*, 576）。幼少のシャーの即位でキジルバーシュ諸部族の権力闘争が激化し、サファヴィー朝領内は内乱状態に陥った。タフマースプが940年代の初めに内乱の平定に成功すると、950年代以降はキジルバーシュの勢力を抑え、王権の安定強化が謀られていく（羽田（1987）参照）。歴代のシャーによる定住民優遇の婚姻政策や、宮廷祝祭行事としてのノウルーズの開催も、そのような政策の流れに位置づけられる。宮廷の祝祭行事としてのノウルーズは、恐らく963（1555-6）年頃に行われたカズウィーン遷都後に盛大に催されるようになり、ムハンマド・フダーバンダ時代に定着したと思われるが、まさにこの時期と文書の発行日にヒジュラ暦とトルコ暦が併記される時期とが一致す

¹²⁾ 編者の *Nawā'i* はこの勅令の出典を明示していない。インシャー手引書は文書作成を担当する書記（ムンシー）のための一種の用例集で、必ずしも原文がそのまま収録されているわけではない。

る。アクバル時代のムガル朝でのイラーヒー暦の導入のように徹底したものはなかったとしても、中央集権化政策の一端として、サファヴィー朝でもヒジュラ暦に代わる暦法改革の試みが行われたといえよう。

アッバース 1 世時代の文書の発行日にヒジュラ暦とトルコ暦が併記される例は、即位 2 年目の 996 年 *Zū al-Qa'da* 月 (1588) / 子年の 1 例のみで、これ以降、文書発行年におけるヒジュラ暦とトルコ暦の併記の慣行は途絶える⁽¹³⁾。しかし、ムガル朝の暦法改革で見られたのと同じ様に、アッバース 1 世時代の歴史叙述の分野ではトルコ暦優先の編年記述の形式が採用され、宮廷行事としてのノウルズの役割がより重要視されてくる。

Ⅱ サファヴィー朝年代記へのトルコ暦の導入と叙述形式の変遷

サファヴィー朝では多くの年代記が著わされた⁽¹⁴⁾。その半数近くが世界史、または世界史の編纂を意図して書かれたもので、残りがサファヴィー朝年代記に特化している。サファヴィー朝年代記の代表作ともいえる『アッバース大帝史』(*Tārīḥ-i 'ālam-ārā-yi 'Abbāsī*, 以下 TAAA) は、トルコ暦に基づく編年形式で叙述された作品の一例でもある。トルコ暦に基づく編年記述の形式は、しかし TAAA が最初でも最後でもない。表 2 はサファヴィー朝時代に執筆された年代記をほぼ執筆順に並べ、そのなかでトルコ暦が編年の叙述形式に使われているものについては、その形式を提示したものである⁽¹⁵⁾。

表をみると、Gaffarī Qazwīnī (~975 (1567-8) 年) の *Nusah-i jahān-ārā*

(13) アッバース 1 世が即位したのは 995 年 *Zū al-Qa'da* 月 14 日 (1587 年 10 月 16 日) / 亥年。

(14) サファヴィー朝の歴史叙述の変遷については、Quinn (2000), 14-29. および Quinn (2004). 諸年代記や年代記作家についても簡潔な説明がある。

(15) この表にはシャーや将軍の戦いを記録した、いわゆる戦記もの (例えば *Futūḥāt-i šāhī* や *Futūḥāt-i humāyūn* など) は含まない。またサファヴィー朝末期に好んで書かれた、王家と王朝初期の歴史を物語風に叙述した作品群、例えば *Tārīḥ-i 'ālam-ārā-i Šāh Ismā'il* や *Tārīḥ-i 'ālam-ārā-i Šāh Tahmāsb* など (cf. Morton (1990)) も考察対象から除外した。サファヴィー朝が実質的に滅亡した 1722 年以降に完成した年代記も考察対象とはしていない。

表2 サファヴィー朝年代記

H=ヒジュラ暦 T=トルコ暦 J=統治年

著 者	書 名	執筆年・範囲	形 式
Ḥwāndamūr	<i>Ḥabīb al-siyar</i>	～930	
A. Maḥmūd b. Ḥwāndamūr	<i>Zail-i ḥabīb al-siyar</i>	～957	
Mir Yahyā al-Qazwīnī	<i>Lubb al-tawārīḥ</i>	～948	
Ḥuršāh	<i>Tārīḥ-i ilti-i Nizām-Šāh</i>	～972	
Gaffarī Qazwīnī	<i>Nusaḥ-i jahān-ārā (JA)</i>	～972	H+T
‘Abdī Beg Šīrāzī	<i>Takmilat al-aḥbār</i>	～978	T+H
Būdāq Munšī Qazwīnī	<i>Jawāhir al-aḥbār</i>	～984	
Ḥasan Rūmlū	<i>Aḥsan al-tawārīḥ</i>	～985	H
Qāzī Aḥmad Qumī	<i>Ḥulāṣat al-tawārīḥ</i>	999	J+T+H
Maḥmūd Naṭanzī	<i>Nuqawat al-āṭār</i>	～1007	
Jalāl al-Dīn Munajjim Yazdī	<i>Tārīḥ-i ‘Abbāsī</i>	～1020	H+T
Iskandar Beg Turkmān	<i>Tārīḥ-i ‘ālam-ārā-yi ‘Abbāsī</i>	～1038	T+H+J
Iskandar Beg Turkmān	<i>Zail-i Tārīḥ-i ‘ālam-ārā-yi ‘Abbāsī</i>	～1052	T+H+J
Faḏlī Ḥūzānī Iṣfahānī	<i>Afzal al-tawārīḥ</i>	～1038	T+H+J
‘Abd al-Fattāḥ Fūmanī	<i>Tārīḥ-i Gilān</i>	923～1038	(T+H)
Mīrza Beg Janūbadī	<i>Rauzat al-Šafawīyah</i>	～1036	
Muḥamad Ma‘šūm Iṣfahānī	<i>Ḥulāṣat al-siyar</i>	1038～1052	T+H
Mullā Kamāl Munajjim	<i>Zubdat al-tawārīḥ</i>	(1652)	
Waḥīd Qazwīnī	<i>‘Abbās-nāmah</i>	～1074	T+H
Walī-Qulī Šāmlū	<i>Qiṣaṣ al-ḥāqānī</i>	～1077	H+T
Muḥammad Yūsuf Wālīh	<i>Ḥuld-i barīn</i>	1078	T+H

(*Tārīḥ-i jahān-ārā*, 以下JA)以降, トルコ暦を編年形式の基準とする年代記がサファヴィー朝の歴史叙述の主流となっていくことがわかる¹⁶⁾。JAの執筆の開始および完成の年代は不明である。しかし年代記におけるトルコ暦の導入が, 文書の発行日にトルコ暦が併記された時期とほぼ同時期であることはあきらかである。

叙述史料でも事件の月日はヒジュラ暦の年月日で記録され, ペルシア風の月名が書かれることはまれだが, それでも文書と同時期, 恐らくはより早い時期に十二支年にペルシア風の月名を使用した記録が残っている。タフマースプは

(16) 編年の叙述形式を採用した年代記とは, 写本のなかで年の変わり目の部分を書体の変更や赤インクなどで見出しとし, 叙述部分と明らかに区別している作品群のことを指す。

自ら伝記を執筆しているが、この伝記で彼は自身の誕生日をヒジュラ暦920年 Zū al-Ḥijja 月 29 日（西暦 1515 年 2 月 24 日）、戊年 Isfand 月のこととしている（*Denkwürdigkeiten*, 576）。そして、930 年代の出来事について、トルコ暦を基準に、これにヒジュラ暦を併記するかたちで叙述して行く。ただし、タフマースプが生まれた 920 年末（1515 年 2 月）から 930 年代にすでに十二支年の使用が慣例となっていたのかはわからない。タフマースプの自筆とされる現存 2 写本は、彼が 971（1563）年にそれぞれインドの Binjapūr の ‘Alī ‘Ādil Šāh と Quṭbšāh の Humāyūn に贈ったとされる（*Denkwürdigkeiten*, 567）。最初にトルコ暦をサファヴィー朝年代記に導入した Gaffarī は 967（1559-60）年／未年にオスマン帝国のバヤズィトがサファヴィー朝下に亡命し、首都カズウィーンに到着した様子を自ら目撃し、未年を詠み込んだ自作の詩を残している。以上から、ヒジュラ暦 960 年代の末に、サファヴィー朝宮廷周辺ではトルコ暦の使用が一般化していたか、意図的に導入する動きがあったことは間違いなさであろう。

1) タフマースプ時代の年代記とトルコ暦の導入 : *Nusah-i jahān-ārā* と *Takmilat al-aḥbār*

イスマール 1 世時代に書かれた年代記は Ḥwāndamīr（～1535-6 年頃）の *Ḥabīb al-siyar* のみである。Ḥwāndamīr はティムール朝末期のヘラートで活躍した歴史家で、ヘラートがサファヴィー朝に征服された後、世界史 *Ḥabīb al-siyar* を執筆した。サファヴィー朝史はその世界史の最後の部分の一部である。Ḥwāndamīr の息子 Amīr Maḥmūd がタフマースプ時代に執筆した *Zail-i Ḥabīb al-siyar* は、その続編にあたる。この二書はティムール朝ヘラート史家の伝統を受け継いだものである。

タフマースプ時代は世界史の一環としてサファヴィー朝年代記が書かれるようになる時代である。タフマースプ時代に最初に書かれた年代記は Yaḥyā b. ‘Abd al-Laṭīf al-Qazwīnī（～948（1555）年）の *Lubb al-tawārīḫ* である。*Lubb* は簡潔な世界史概観で、Yaḥyā al-Qazwīnī はタフマースプの四男バフラーーム・ミールザーの愛顧を受け、*Lubb* を執筆したが（*Lubb*, 260）、最後はスンナ派信仰を理由に処刑されたという（Quinn（2000）, 16）。*Tārīḫ-i ūlū-i Nizām-Šāh* を執筆し

た *Ḥuršāh* は、インドへ移住したシーア派のペルシア系移民の子で、*Niẓām Šāh* からサファヴィー朝宮廷に二度遣わされて二十年近くを過ごし、インドに帰還後にサファヴィー朝と周辺地方王朝の歴史を執筆した。すでに紹介した *Ḥabīb al-siyar* とその続編、そして上述二書は一貫してヒジュラ暦での歴史叙述が行われている。

すでに述べた通り、サファヴィー朝年代記で最初にトルコ暦を導入したのは *JA* である。その数年後に 978 (1570) 年までの事件を著した ‘*Abdī Beg Šīrāzī* (931 (1524-5) ~ 988 (1580-1) 年) の *Takmilat al-aḥbār* が執筆された。タフマースプ時代の年代記では、この二書がトルコ暦を採用している。*Takmilat* は *JA* に大きく依拠したとされ (*Takmilat*, Muqaddimah, 23), 記述にも多くの類似点が見られるが、この二書の編年の形式には大きな違いがある。

JA はイスマーイールが亡命先のギーラーンから出立した 905 (1499) 年から十二支年を併記し、編年での歴史叙述を行うが、あくまでもヒジュラ暦を優先した編年を徹底し、それに十二支年を併記するという形式をとる。ヒジュラ暦の見出しの直後に、その年中にノウルーズを迎えた十二支年とそのノウルーズの日付をヒジュラ暦に換算して記録する。イスマーイールのギーラーン出立は 905 年 *Muḥarram* 月中旬 (1499 年 8 月下旬) に起こり、これは未年 *Šāhriwār* 月の出来事であるが、905 年の年内 (*Ša‘bān* 月) にあるノウルーズは申年のものなので、905 年は申年と対応させる。具体的な表現としては「905 年／申年のノウルーズは *Ša‘bān* 月 10 日、水曜日」(*JA*, 264) となる⁽¹⁷⁾。

Takmilat はサファヴィー朝の創成期の事件はヒジュラ暦で記録しているが、912 年／卯年からは概ねトルコ暦優先での編年形式を明確にし、十二支年の記載の後にその年のノウルーズがあったヒジュラ年を併記する。ヒジュラ暦とトルコ暦の対応については、「一部は 944 年、一部は 945 年の戌年に」(*Takmilat*, 88), 「大部分は 955 年 (と重なる) の申年に」(*Takmilat*, 97) などという表現で、

(17) 現代の換算では、905 年／申年のノウルーズは *Ša‘bān* 月 9 日になるが、ヒジュラ暦では日没で日付が変わること、また天文学上の春分と暦上の春分は異なるので、905 年の正確な春分を割り出さない限り、10 日を間違ひとは言ひ切れない。1 ~ 2 日のずれは他の年代記も含め、しばしば見られる。もっとも、写本の筆写ミスの可能性の少ない、明らかな換算間違いも *JA* では散見される (例えば 932 年や 965 年)。

両者のずれの状況を常に読者に明示する工夫をしている。*Takmilat* の現存写本は1つしかなく、後世の年代記作家たちの典拠とされている形跡もないが⁽¹⁸⁾、以後のサファヴィー朝年代記ではトルコ暦優先の形式が主流となっていく。

ヒジュラ暦、トルコ暦の優先順で両者は異なるが、暦の変換について両者ともに詳しい知識を持っていたことは間違いない。純粋な太陰暦であるヒジュラ暦は太陰太陽暦であるトルコ暦よりも11日短いため、918年、952年のようにヒジュラ暦の1年がトルコ暦の1年のなかに収まってしまい、ノウルーズを持たないヒジュラ暦が出てくるが、暦の換算に混乱はみられない⁽¹⁹⁾。*JA* は前年の917年のところで「一部は未年、一部は申年（と重なる）」(*JA*, 274) と説明し、*Takmilat* は918年にはヒジュラ暦での項目を立て、952年のところでは「巳年、951年 *Zū al-Hijja* 月27日がノウルーズで、952年 *Muharram* 月まで3日を残し、953年 *Muharram* 月7日に終わる（その年に）」(*Takmilat*, 94) と詳述している。

タフマースプ時代に書かれた残りのふたつの年代記は、イスマーイール2世時代に完成した。両書はヒジュラ暦に基づいた叙述で、トルコ暦は使用しない。トルコ暦を用いる作品と用いない作品の違いについては次の章で考察する。

2) アッバース1世時代の年代記

a) *Ḥulāṣat al-tawārīḥ*

アッバース1世時代には、歴史叙述が世界史叙述から王朝史へと移行し、サファヴィー朝の歴史叙述が確立していく時代にあたる。彼の時代に書かれた数多くの年代記の大部分はトルコ暦を優先使用する編年形式を採用している。

まず最初に完成したのは *Qāzī Aḥmad Qumī* (953 (1546) ~ ? 年) の *Ḥulāṣat*

(18) 例えば、アッバース1世時代にトルコ暦を採用している後継年代記作家である *Qāzī Aḥmad Qumī* および *Iskandar Beg Turkmān* も、先行の年代記作家として、*Ḥwāndamīr*, *Yahyā al-Qazwīnī*, *Ḥasan Rūmlū* らとともに *Ghaffārī*, を挙げているが、*ʿAbdī Beg Širāzī* の名前は出てこない。

(19) ノウルーズのないヒジュラ年前後での換算の混乱は諸年代記で頻繁に発生する。例えば *Afzal al-tawārīḥ* の第1, 2巻は、*Fazlī Ḥūzānī Iṣfahānī* が第3巻を執筆後、トルコ暦を使用していない *Aḥsan al-tawārīḥ* を典拠にインドで執筆したとされるが (*Melville* (2003), 78-79), ノウルーズのないヒジュラ年を考慮せずにアッバース時代を起点に逆算した結果、タフマースプ即位2年目の時点で2~3年のずれが生じている(年数はヒジュラ暦とトルコ暦のどちらを優先するかで異なる)。

al-tawārīḥ (以下、*Ḥulāṣat*, 引用は Iṣrāqī 版)である。*Ḥulāṣat* 自体は984 (1576) 年にイスマーイール 2 世の命によって執筆が開始され (*Ḥulāṣat*, 5), 999 (1591) 年に完成した全 5 巻の世界史の最終巻にあたり、タフマースプ時代の歴史叙述の流れを汲む。*Ḥulāṣat* はイスマーイール 1 世時代初期からトルコ暦を優先した編年形式での叙述を行うが、同作品を先行の *Nusaḥ-i jahān-ārā* と *Takmilat al-aḥbār* と区別する第一の特徴は、*Ḥulāṣat* がタフマースプの即位以降、十二支年に基づいて諸事件を整理するだけでなく、それに統治年 (sāl) という、新しい時代区分の概念を導入したことである。Qāzī Aḥmad Qumī が執筆の当初から統治年という着想を抱いていたのかは不明であるが、1584年のイラーヒー暦導入により、統治年 (julūs) に基づく歴史叙述をするようになった、ムガル朝との共時性がここにも見られることは注目に値しよう⁽²⁰⁾。

Ḥulāṣat はタフマースプが即位したヒジュラ暦930年 Rajab 月 (1524年 5 月) / 申年の翌年の酉年を統治 1 年目とし、これ以降、統治年数を年代記叙述の基準としていく⁽²¹⁾。形式としては「統治年+十二支年+ノウルーズのヒジュラ暦での年月日」の順で、「天と星々の創造主選ばれた御方の統治の40年目、亥年ノウルーズは970年 Rajab 月16日、木曜日」(*Ḥulāṣat*, 436) という具合である。ヒジュラ暦とトルコ暦の各年の対応については、ノウルーズを持たない952 (1545) 年の前後で明らかな混乱がみられるが、自ら宮廷に出仕していた時期、例えば985 (1577) 年の記録は正確である⁽²²⁾。

ノウルーズやそのヒジュラ暦での日付を記録することは *JA* や *Takmilat* もす

(20) ムガル朝ではイラーヒー暦の採用後、貨幣にも統治年を刻印するようになったが、サファヴィー朝では貨幣への統治年の導入は観察されない。ただし、ムハンマド・フダーバンダ時代の貨幣には、統治年と思われる数字が刻印された989年(統治5年目) 鑄造の貨幣が1例だけ大英博物館に現存する (*Catalogue*, 270. 写真は掲載されていない)。同様の貨幣が他にも発見されれば、タフマースプ時代末期からアッバース時代初期にかけての暦法改革を考察する上で貴重な史料となろう。

(21) 遠征などの大きな事件には、独立した逸話(トピック)ごとの見出しが立てられる。これはペルシア語歴史叙述には普遍的な形式で、編年形式を用いた年代記の多くもトピック形式を併用する。

(22) 985年もノウルーズを持たない年。前年の984年はSafar 月にタフマースプが死去、その後のZū al-Ḥijja 月20日に丑年ノウルーズ (1577年 3 月10日)、イスマーイール 2 世は1年半で変死という変則的な状況で、ヒジュラ暦985年の項を立て、そこに丑年のノウルーズを記録している (*Ḥulāṣat*, 644)。

で行っているが、これらの二書にとってノウルーズは春の訪れや季節移動を告げる季節の変わり目でしかない。これに対して、*Hulāṣat* はノウルーズがどこでどのように祝われたのかを詳細に記録するようになる。これはタフマースプがカズウィーンに遷都して以降にノウルーズが宮廷行事となり、王権をアピールする儀式として政治的な重要性を帯びていったことと軌を一にする。これが *Hulāṣat* が先行二書と異なる第二の特徴である²³⁾。

後述するように、サファヴィー朝の年代記作家は、ほとんどが宮廷と深い関わりのある人物であり、多くは文官職についていた。だが、ヒジュラ暦とトルコ暦とのずれを換算し、正確に記録するためには、天文学の知識や天文表 (zīj) が必要となる (cf. Melville (1994), 84-85)。サファヴィー朝ではイル・ハーン朝やティムール朝のような天文表の存在は知られていないが、トルコ暦を採用している年代記作家たちは、天文学の知識に接する機会を有していたと考えるのが自然であろう。これについては次章で考察するが、彼らが出仕する以前に起こったと思われる事件の記述の暦の換算に多く間違いが観察されるのは、トルコ暦を使用する *Hulāṣat* 以降の年代記に共通してみられる現象で、宮廷での天文表の利用が年代記の執筆と深く関わっていたことを示唆するものともいえる²⁴⁾。

b) *Tārīḥ-i ‘Abbāsī*

トルコ暦を採用したアッバース時代の年代記としては、*Hulāṣat* とサファヴィー朝年代記の完成形ともいえる *TAAA* との間に、*Tārīḥ-i ‘Abbāsī* (以下、

²³⁾ *Hulāṣat* では、写本ごとに若干の形式の差異が観察される。*Hulāṣat* はアッバースの統治 4 年目 (999 年) までを扱っているが、イランに現存する 4 写本を定本に使用した *Isrāqī* 版では、アッバース時代の叙述に統治年がない。一方、ベルリン写本ではアッバース時代も引き続き統治年が使われている。筆者は以前、ノウルーズの祝祭行事の開催地について考察したが (後藤 (2004))、ホラーサーン統治時代のアッバースのノウルーズ時の滞在地について記録されているのはベルリン写本のみであり、これらの情報の有無が存在を知られていない原本の段階でのものなのか、筆写の段階で生じたものなのかは、いまのところ不明である。現存諸写本の詳細については、テヘラン版の校訂者でもある、Echraqi (*Isrāqī*) (1976), 74-78 を参照。

²⁴⁾ 特に *TAAA* の初期の換算間違いについては McChesney が、*Afzal* については Melville (2003) が論じている (脚注 19 参照)。

TA) が著された。サファヴィー朝宮廷では天文学が宮廷生活や政治の決定を左右し、その専門家である天文学者 (munajjim) もまた大きな役割を果たしていた。TA の作者 Mullā Jalāl al-Dīn Munajjim Yazdī もその名が示すように天文学者であり、使者としてギーラーンに派遣されるなど、深く政治に関与した人物でもあった⁽²⁵⁾。

TA はヒジュラ暦を優先しつつ、ヒジュラ暦とトルコ暦併記の編年形式を採用している。TA の形式の特徴は、各ヒジュラ年の表題の後に Muḥarrām 月 (ヒジュラ暦 1 月) 1 日をトルコ暦に換算したものを記録しているところで、例えば「1004 年。この年の Muḥarrām 月 (初日) は未年、ジャラーリー暦 Šahriwār 月 19 日と一致する」(TA, 141)⁽²⁶⁾、「1014 年。この年の Muḥarrām 月初日は巳年 Ḥurdād 月 1 日と一致し、太陽の位置は金牛宮の 29 度 (にあった)」(TA, 280) という具合である。ヒジュラ暦からトルコ暦への逆算、しかも月日までの記録は、正確な天文表を参照する立場にあるか、天文学の専門知識がないと困難であろう。これは Yazdī が天文学者だから可能なことであり、そのことは彼が Muḥarrām 月の太陽の位置まで記録していることから読み取ることができる⁽²⁷⁾。

c) *Tārīḥ-i ‘ālam-ārā-i ‘Abbāsī* (『アッバース大帝史』)

Iskandar Beg Turkmān (968 (1560) 年頃～1043 (1633) 年頃) の筆による『アッバース大帝史』は、サファヴィー朝建国からアッバース 1 世時代の終わりまで、更には次のサフィー 1 世の治世時代までの続編 (後半は別作家による書き継ぎ) を持つ、サファヴィー朝年代記の代表的作品である。TAAA はアッバースの治世を扱う第 2 部からトルコ暦優先の編年での歴史叙述を行うようになる。形式は「十二支年+ヒジュラ暦+統治年数 (julūs)」の順で、見出しの後にヒジュラ暦でのノウルーズの年月日とノウルーズの日のシャーの滞在地や祝祭の

(25) Yazdī は自身について著作ではほとんど説明していない。彼の家系は息子も天文学者で歴史家、孫も執筆活動を行い、3 代にわたって活躍した。Yazdī 家については Mossadegh (1987) を参照。

(26) Yazdī がジャラーリー暦の名称を出しているのは、この年と 1005 年 (TA, 151)。

(27) 太陽の位置が記録されている年は、1002, 1006, 1008, 1011～1017 年。

様子が叙述される。一例としては「幸運の予兆たる亥年の始まり、一部は1020 (1611-2) 年、一部は1021 (1612-3) 年、神の陰たる最も神聖なシャーの即位25年目。この幸運の予兆たる年のノウルーズは、めでたいなかでヒジュラ暦1020年の初め、聖なる Muḥarram 月 6 日、金曜日、ジャラーリー暦の Farwardīn 月 1 日に起こった」(TAAA, 829) となる。

TAAA の形式は、*Ḥulāṣat* の統治年と十二支年の優先順位を逆にしたものであり、形式や典拠など、*Ḥulāṣat* とは多くの類似点を持つ。Iskandar Beg は Qāzī Aḥmad の職場の後輩にあたり、Qāzī Aḥmad も Iskandar Beg と知己を得ていたことを言明しているが (*Gulistān-i hunar*, 54-55), Iskandar Beg は Qāzī Aḥmad との関係について言及せず、典拠にも *Ḥulāṣat* は挙げていない (cf, Calmard, 123-4)。アッパースの統治時代で両者の叙述が重なるのは最初の 5 年間分だけだが、この部分の TAAA の十二支年とヒジュラ暦年の対応の混乱はすでに McChesney により指摘されている通りである (ノウルーズのない1019年でも再度混乱している)⁽²⁸⁾。暦の換算に限っていえば、*Ḥulāṣat* は TAAA より正確であり、理由はともあれ TAAA が *Ḥulāṣat* を参考にしていないのは事実のようである。Erdmann はむしろ、統治年での編年形式を採用し、TAAA の情報源ともなっている『アクバル大帝史』との関係に注目している (Erdmann, 493)。トルコ暦の採用理由について、Iskandar Beg は次のように説明している。

歴史の徒の作法として、アラブの習慣で Muḥarram 月初日に始まりがあるヒジュラ暦を採用すべきかと考えたが、そうするとアジャム (=イラン) の住民の大部分は理解できないであろう。なぜならトルコ人とアジャムの住民にとって一年の始まりは統治者 (スルタン) のノウルーズ (*naurūz-i sulṭānī*) であり、それは世界を飾る春の最初 (の日) だからである (TAAA, 379)。

サファヴィー朝下のイラン社会での実際の日常の暦の使用状況について、詳

(28) TAAA の暦の換算間違いの大きな原因のひとつは、TAAA がアッパース治世の初期に、トルコ暦の優先形式にもかかわらず、十二支年とノウルーズの日で重なるヒジュラ暦の年とを対応させず、ノウルーズの後に新年を迎えるヒジュラの年を十二支年に対応させているからである。子年/1021年/統治26年目からはこの問題は解消される (TAAA, 852)。

しく知る術はない。しかし、本来イスラームに関わる学問分野でヒジュラ暦が使われるべきとされるなかで、中国起源の十二支がペルシア古来の暦と折衷し、トルコ暦という名称を持つ新しい暦として定着していったことが、上述の引用から確認できる。また、先行の *Ḥulāṣat* と同様に、毎年ノウルーズの祝祭行事について詳細な記述を残しているのも TAAA の特徴で、ノウルーズの重要性が増していたことを裏付ける。

地方年代記も中央の歴史叙述の影響を受けた。16世紀末に地方王朝が廃止されたギーラン地方では、*Tārīḥ-i Gilān* が同地方の併合前後からトルコ暦での編年叙述に移行する (cf. *TG*, 179)。作者の ‘Abd al-Fattāḥ Fūmanī は地元出身で、地域財務に携わった (*TG*, 204)。

d) *Afzal al-tawārīḥ*

Faḏlī Ḥūzānī Iṣfahānī の *Afzal al-tawārīḥ* は、アッバースの治世を扱った第3巻の存在が近年になって確認された、サファヴィー朝年代記で、Melville や Morton らによってその史料価値が評価されているが、叙述形式は TAAA を踏襲したものである。「十二支年+ヒジュラ暦年+統治年数 (julūs)」の順で、十二支優先の形式である。そして TAAA 以上に暦の換算間違いが多い (脚注 (19) 参照)。

3) サフィー 1 世時代以降

サフィー 1 世時代以降にもトルコ暦優先の編年形式の年代記が書き継がれて行く。

Muḥammad Ma‘šūm b. Ḥwājagī Iṣfahānī の *Ḥulāṣat al-siyar* (以下、*HS*, 引用は Afšār 版) はサフィー 1 世の命で書かれた、サフィー 1 世時代の年代記である²⁹。Muḥammad Ma‘šūm は TAAA が厳密な編年にこだわるあまり、事件の関連性がわかりにくくなっていると Iskandar Beg 批判を行う (*HS*, 29)。そこでトピッ

²⁹ Muḥammad Ma‘šūm はもともと世界史の執筆を意図していたが、サフィーに催促され、ティムール朝時代まで執筆を終えたところでサフィー時代史を優先したという (*HS*, 327)。

クごとの項目を増やすなどの独自の工夫をしているが、トルコ暦優先の編年形式は基本的に *TAAA* を踏襲している。統治年はないが、各年の冒頭にはノウルーズのヒジュラ暦での年月日が春分の時間まで正確に記録され、ノウルーズの祝祭の様子が詳細に叙述される。

アッバース 2 世時代には 3 つの年代記が執筆された。この時代でも見出しにふたつの暦を併記する編年形式は受け継がれるが、むしろトピックごとの見出しの割合が増えていく。

Muḥammad Ṭāhir Waḥīd Qazwīnī (1015 (1606-7) 年 ~ 1110 (1698-9) 年頃) の *‘Abbās-nāmah* (以下, *AN*) は、サファヴィー朝の建国からアッバース 2 世の統治 22 年目までを扱う。*AN* はトピックごとの見出しを主流とするが、ムハンマド・フダーバンダ時代からトルコ暦とヒジュラ暦を併記するようになる。アッバース 1 世時代には統治年数を併記する事例もあるが、アッバース 2 世時代に統治年数が記録されているのは、1 年目、20 年目、21 年目のみで、後は十二支年とヒジュラ暦年のみの記載になる。アッバース 1 世時代中期からは各年のノウルーズの祝祭について記述されるようになっていくが、記述は簡潔である。

Walī-Qulī b. Dāwūd-Qulī Šāmlū (1035 (1625-6) ~ ? 年) の *Qīṣaṣ al-ḥāqānī* (以下, *Qīṣaṣ*) は、ヒジュラ暦を優先して両暦を併記するが、見出しはすべてトピック形式で、諸事件の経過説明重視の叙述がより鮮明になっている。年月日は主要な事件の記述の冒頭に「この年、ヒジュラ暦 1047 年、トルコ暦の丑年に ~」(*Qīṣaṣ*, 254)⁹⁰、「この年、ヒジュラ暦 1056 年、トルコ暦の酉年の末に ~」(*Qīṣaṣ*, 304) という文言で明記され、統治年が記録されることもほとんどない。

Huld-i barīn (引用は Naṣīrī 版) の著者 Muḥammad Yūsuf Wāliḥ Iṣfahānī (988 (1580-1) 年頃 ~ ? 年) は、*AN* の著者 Muḥammad Ṭāhir Waḥīd Qazwīnī の兄弟で、アッバース 2 世時代からスレイマン時代にわたってワジールを務めた。*Huld-i barīn* は全 8 巻からなる世界史で、最終巻が 1078 (1667-8) 年にいたるサファヴィー朝史になっている。同時代史にはトルコ暦優先の編年形式を採用し

⁹⁰ 丑年のノウルーズは 1046 年 Šawwāl 月 23 日のことだが、*Qīṣaṣ* はヒジュラ暦優先でヒジュラ暦での元旦のある十二支年と対応させているため、丑年は 1047 年となる。

ているが、基本的にトピック形式で物語性を重視した歴史叙述である。注目すべきことは、「大空の幸運なる二星の合の御方（＝アッバース2世）による、王のノウルーズの到来における祝祭の開催。めでたき新年への移り変わり」（*Huld*, 556）などのように、時には年を表記しないまま、新年の訪れを表象するものとして、ノウルーズとその祝祭が毎年の見出しの定番に使われていることである⁽³¹⁾。

以上を総括すると、サファヴィー朝では文書の発行日にトルコ暦が併記されるようになったヒジュラ暦960年代末から、トルコ暦が歴史叙述にも採用されるようになっていった。しかし、純粹太陰暦のヒジュラ暦と太陰太陽暦のトルコ暦との併記は難しく、「十二支年＋ヒジュラ暦年＋統治年数」の併記による編年形式を完成させた Iskandar Beg の TAAA の混乱が露呈しているように、年代記作家らはそれぞれ工夫を凝らしたとはいえ、複数の暦法の併記に成功した例はなかった。最終的にサファヴィー朝の後期には、伝統的なペルシア語の歴史叙述形式であるトピック形式が再び主流となっていった。また、天文学者 Munajjim Yazdī が書いた TA を除けば、作中でペルシア語の月名はほとんど使用されず、諸事件はヒジュラ年月日で記録された。このことは、実際の日常生活はどうであれ、法や行政上の案件が基本的にヒジュラ暦に基づいて処理されていたことをあらわしていよう。

一方、ノウルーズに関していえば、季節の変わり目を示すに過ぎなかったノウルーズが、大きな宮廷の年中行事として定着したのみならず、シャーの権威を確認する儀式として重要性を増していったことが、年代記の記述から読み取れる。

Ⅲ サファヴィー朝の年代記作家たち

タフマースプ時代後半の960年代末期（1560年頃）から、サファヴィー朝では

(31) この年は申年／1066年で、本文中に両暦での年月日が表記されている。見出しに年が表記されない例は卯年／1061年（*Huld*, 498）、未年／1065年（*Huld*, 540）など。

トルコ暦が公式の暦として行政文書や歴史叙述に使用されるようになっていったが、すべての年代記がトルコ暦を採用したわけではないことは、表2からもあきらかである。年代記作家の多くは官職に就いていたが、その中でも初期にトルコ暦を用いた者たちは、特定の集団に属していた。

トルコ暦を最初に採用したJAの著者Gaffarīは、芸術の愛好家で知られたタフマースプの兄弟サーム・ミールザーの愛顧を受け、JA以外にも*Nigāristān*という著名人の逸話集を執筆した。知識人の家系に生まれ、父はレイのカーディー（法官）で、自身もカーディーのニスバを持つ（*Tuhfa*, 120-121）。彼の宮廷での詳しい活動を窺い知る記録は残されていないが、晩年を過ごしたと思われるインドで書かれた年代記は、彼が「学者、ムンシー（文書庁書記）、歴史家、比類なき多才な人物」で、イラクの王子（＝サーム・ミールザー）の財務業務（*wizārat*）（*Muntakhab*, III, 185）の職にあったとする。

*Takmilat*の著者‘Abdī Beg Šīrāzīは転職、転地を繰り返した人物で、自身の遍歴については*Takmilat*にも詳しく書いている⁽³²⁾。彼は十代で財務庁（*daftar-hānah*）での勤務からキャリアをスタートし、主に財務関係の仕事に携わった（*Takmilat*, 73, 127; *Tuhfa*, 95）。973（1565）年／丑年に起ったヘラートのMuḥammad Ḥān Šaraf al-Dīn Takkalūの反乱の平定後には、勝利の書の草稿作成の命を受け、ムンシー・アルママーリク（文書庁長官）のMuḥammadī Beg Kujujīとともにこれを御前に提出したという（*Takmilat*, 124-125）。

アッバース時代に*Hulāṣat*を完成させたQāzī Aḥmad Qumīは、父も宮廷でムンシーなどを歴任した⁽³³⁾。975（1568）年には父とともにタフマースプの宮廷にあって、オスマン朝セリム2世の即位を祝う書簡やギーラーン遠征の勝利の書の作成に携わった（*Hulāṣat*, 545-546）⁽³⁴⁾。980年代にはムスタウフィー（財務官）として財務庁などに勤務した（*Hulāṣat*, 710, 723）。

TAAAの作者Iskandar Beg Munšīは、ニスバがあらわす通りムンシーで、

(32) 彼のより詳しい履歴については刊本の校訂者であるNawāīの序文を参照。

(33) *Hulāṣat*には3種の刊本があり、いずれも校訂者による詳細な考察が加えられている。Qāzī Aḥmadのより詳しい履歴については、先行研究を網羅して紹介しているGlassen版解説を参照。

(34) *Tahmāsh*, 460-471に掲載されている書簡が、この時の書簡の写しと考えられる。

1001 (1592-3) 年にアッバースのムンシーとして取り立てられ (TAAA, 455), TAAA のなかでも自身が勅令などの文書の作成に携わったことを書いている (TAAA, 596, 801-802, 924-925)。また Qāzī Aḥmad Qumī は Iskandar Beg Munšī の知り合いであることを述べているが、これはムンシーとして同じ職場にいたからであろう。

タフマースプ時代末期からアッバース時代にかけてトルコ暦を採用した年代記作家 4 名の職歴を検討すると、財務に携わっている場合もあるが、いずれもムンシーとして文書行政に従事したという共通点を持つ。

17世紀後半に著されたサファヴィー朝の行政手引書によれば、サファヴィー朝の官房は文書庁 (dār al-inšā) と財務庁 (daftar-hānah) の 2 部門に分かれ、文書庁の長官がムンシー・アルママーリク、財務庁の長官がムスタッフィー・アルママーリクであった。文書庁は16世紀の末まで伝達文書、外交文書ほか全ての種類の文書を扱い、冒頭に定型句を持つ文書の作成に携わった。定型句には、返書に使われる *farmān-i humāyun šaraf-i nafāz yāft* (略号 FHŠNY), 支払いやトゥユール授与文書に使われる *farmān-i humāyūn šud* (略号 FHŠ), 勅令のための *ḥukm-i jahānmutā‘ šud* (略号 HJŠ) の 3 種がある。うちの前者 2 つは中央集権強化の象徴として、タフマースプ時代に導入されたものであった。一方、財務庁は定型句のない文書を作成した (Busse, 59-68; Schimkoreit, 25-26; Fragner (1999), 289; TM, 61-62, 132)。

表 1 で発行年に十二支年が併記されている文書を確認すると、サファヴィー朝以前からの定型句である *sözümiz* (略号 S) を用いた文書やイスマール 2 世の例外はあるが、ほとんどの文書が FHŠNY, または FHŠ の定型句を持ち、文書庁で作成された文書であることがわかる。サファヴィー朝前期の行政制度には不明な点が多いが、年代記にトルコ暦を採用した年代記作家たちが、文書庁での文書作成に携わったムンシー出身者であったということは確認できよう。また、文書にトルコ暦が採用されている以上、彼らが天文表を利用し、トルコ暦に精通していたであろうことは想像に難くない。

一方、トルコ暦を採用していない年代記作家たちも存在する。Ḥasan Beg Rūmlū (937 (1531-2) ~ ? 年) は Gaffarī や ‘Abdī Beg と同時代の年代記作家で、

各人はカズウィーン宮廷で互いに見知っていた可能性が高いが (*Takmilat, muqaddimah*, 12-13), Ḥasan Rūmlū は世界史 *Aḥsan al-tawārīḥ* (以下, *Aḥsan*) でヒジュラ暦での編年形式を徹底している。彼はルームルーのニスバが示す通り, キジルバーシュの一部族の出身であり, タフマースブにコルチとして仕え (cf. *Aḥsan*, 389), 985 (1578) 年までのサファヴィー朝史である *Aḥsan* の第12巻をイスマール 2 世に献呈した (*Aḥsan*, 10)。武官としての経歴を歩んだ Ḥasan Rūmlū には, 文書作成に必要なトルコ暦や天文表の利用は無縁であっただろう。

タフマースブ時代にはもうひとつ *Jawāhir al-aḥbār* (以下, *Jawāhir*) という年代記が書かれている。著者の Būdāq Munṣī Qazwīnī もまたムンシーのニスバを持ち, 主に財務官僚としてサファヴィー朝宮廷に仕えた (*Jawāhir*, 187-191)。ムンシーの彼がトルコ暦を用いなかった理由をあえて探すとしたら, トルコ暦の文書作成への採用が強化された960年代後半から970年代 (1560年代) にかけての彼のキャリアに求めることになろう。Būdāq Munṣī は955年から965年 (1548-9~1557-8年) の間, Āqā Kamālī のワジール兼監査官 (ムマイヤズ) として Bistām に, 965年から973年 (1557-8~1565-6年) までは Taršiz と Sabzawār のハーキムのワジール兼ワキールとして勤務し, 宮廷からは離れていた。973年から979年 (1565-6~1571-2年) まではほぼ無職で, 980 (1572-3) 年前後の数年をカズウィーン会計官 (ḥisāb-i māl wa maḥṣūl wa ḥārij-i Qazwīn) として務めていたにすぎない⁽³⁵⁾。68歳で *Jawāhir* を執筆終了した984 (1576-7) 年には, 2年前から再び無職になっていた (*Jawāhir*, 190)。

アッバース 1 世時代以降の年代記作家にもトルコ暦を使用していない者たちがいる。*Nuqāwat al-āṭār* の作者 Maḥmūd b. Hidāyat Allāh Afūṣṭa'ī Naṭanzī (938 (1531-2) ~? 年) については, *Nuqāwat* に散見される情報以外, 詳細な履歴はわからない。彼の父はバフラーム・ミールザーの愛顧を受けていたが (*Nuqāwat*, 6), 本人と宮廷との関わりを示す史料はない。McChesney によれば, Naṭanzī はアッバースの宮廷に雇われていたが, アッバースへの反感が籠った

(35) Būdāq Munṣī は自身の履歴を著作で詳細に述べているが, 不一致が多い。刊本校訂者の Bahrām-nizād は序文でこれを正して整理しているので, 年代についてはこちらを主に参照した。

記述が原因で後代の歴史家には引用されなかったという (McChesney (1983), 105; Quinn (2000), 20)。Nuqāwat は凝った文体の物語叙述で、日付の記載は限られている。また、ムハンマド・フダーバンダ妃暗殺やノウルーズの宮廷行事についての記述がないことなど、宮廷との接触は限られていたように推察される。985 (1577) 年のムハンマド・フダーバンダ即位時のカズウィーン入城の日付には、ヒジュラ暦の年月日のみでなく、ペルシア風の月日 (ジャラーリー暦 Urdibihist 月 1 日) まで記録していて不自然だが (Nuqāwat, 64), 当時のトルコ暦使用の高まりを示唆しているともいえよう。

Rauzat al-Ṣafawīyah の著者 Mīrzā Ḥasan Beg Junābadī も、本人についてはニスバからホラーサーン地方の Junābad 出身であろうということくらいしかわからない⁽³⁶⁾。

タフマースプ時代後半からトルコ暦に基づく編年形式の定着に貢献したサファヴィー朝年代記作家たちは、宮廷で主に文書行政に関わるムンシー出身者たちで⁽³⁷⁾、その暦法に関する知識を歴史叙述にも利用した。また、天文学者自身が年代記を書く例もあった。これらの年代記はシャーの命を受けて執筆されたり、王族に献呈されたもので、サファヴィー王家の権威を人々に知らしめる、いわば正史としての性格を持っていたといえよう⁽³⁸⁾。

(36) サフィー 1 世時代には、Zubdat al-tawārīḥ という世界史も書かれている。著者 Mullā Kamāl b. Jalāl al-Dīn Munajjim Yazdī は TA の著者 Munajjim Yazdī の息子で、父と同様に天文学を修め、サフィー 1 世時代に Munajjim-bašī となった (Mossadegh, 127)。今回確認した BM 写本はノウルーズの記述は散見されるが、日付はヒジュラ暦のみで記録されていた。BM 写本は他の作品との合本にされた、ごく一部のみの写本なので、別写本 (Royal Asiatic Society, Morley, 43) がトルコ暦を使用している可能性は否定できない。

(37) アッバース 2 世時代の Ḥuld-i barīn の著者 Muḥammad Yūsuf Wālih Iṣfahānī も財務庁でキャリアをスタートし (Ḥuld, muqaddimah, 26), 兄弟の Muḥammad Ṭāhir Waḥīd Qazwīnī も、アッバース 1 世時代に文書庁の業務の一部を引き受けるかたちで創設された、御前における文書の記録官 (majlis-nivīs もしくは waqā'ī-nigārī (= waqī'ī-nivīs), cf. TM, 52-53, 197-198) の職に就いていたという (AN (Ṣādiq 版), pīšguftār, 35-36)。

(38) サフィー 1 世時代の Ḥulāṣat al-siyar の作者 Muḥammad Ma'sūm は、駱駝舎の会計 (ašrāf-i šuturḥān) や厩舎の会計 (ašrāf-i tawīlah) など、宮廷内での職位は高くなかったが、サフィー 1 世のために詩を選定する役目を負い、シャーとの個人的な結びつきが強かった (ḤS, 311-312)。

お わ り に

サファヴィー朝では西暦16世紀後半に暦法改革の試みや文書行政における中央集権化政策が行われ、年代記におけるトルコ暦の導入はこれと深く関わっていた。集中して改革が実行されたムガル朝とは異なり、サファヴィー朝では在来の暦が変更を加えられながらヒジュラ暦に優先する暦として重用され、同時に宮廷行事としてのノウルーズの役割が重視されていった。これらの諸改革に文官として携わり、公的な記録として正当化する役割を担っていたのが、ムンシー出身の年代記作家たちだった。

サファヴィー朝でトルコ暦が採用されるまでには、かつての旧モンゴル帝国領における十二支の使用の継続があったであろうことは言うに及ばないが、ティムール朝の歴史叙述や文書における十二支の使用に関する研究は、いまだ行われていないのが現状である。サファヴィー朝の歴史叙述がティムール朝の歴史叙述の伝統を受け継いでいるという側面を考えても、今後ティムール朝を結節点とする十二支使用の連続性の解明が望まれよう。

本研究は、独立行政法人日本学術振興会の「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の助成を得た。

【一次史料】

〔サファヴィー朝年代記（表2の順）およびそれ以外の叙述史料〕

Ḥwāndamīr, *Tārīḥ-i ḥabīb al-siyar fī aḥbar afrād al-bašar*, 4 vols., ed. J. Humā'ī, Tehran, 1333.

Amīr Maḥmūd Ḥwāndamīr, *Tārīḥ-i Šāh Ismā'il wa Šāh Ṭahmāsb Šafawī (Zail-i ḥabīb al-siyar)*, ed. M. 'A. Jarrāhī, Tehran, 1991.

Yahyā b. 'Abd al-Laṭīf al-Ḥusainī al-Qazwīnī, *Kitāb-i Lubb al-tawārīḥ*, ed. S. J. Ṭīhrānī, Tehran, 1314.

Ḥuršāh b. Qubād al-Ḥusainī, *Tārīḥ-i ilčī-yi Nizām-Šāh*, ed. M. R. Našīrī & K. Haneda, Tehran, 2000.

Ḥuršāh b. Qubād al-Ḥusainī, "Histoire de l'ambassadeur de Nizāmchāh", in *Chrestomathie Persane: A l'usage des élèves de l'école spéciale des langues orientale vivantes* (Tome

- 2), ed. Ch. Schefer, Paris, 1885.
- Qāzī Aḥmad Gaffarī Qazwīnī, *Tārīḥ Jahān-ārā*, ed. Ḥ. Narāqī, Tehran, 1342.
- ‘Abdī Beg Širāzī, *Takmilat al-aḥbār*, ed. ‘A. Nawā’ī, Tehran, 1369.
- Būdāq Munšī Qazwīnī, *Jawāhir al-aḥbār: Baḥš-i tāriḥ-i Irān az Qarā Qūyunlū tā sāl-i 984 H.Q.*, M. Bahrām-nizād ed., Tehran, 2000.
- Ḥasan Beg Rūmlū, *Aḥsan al-tawārīḥ*, ed. ‘A. Nawā’ī, Tehran, 1357.
- Ḥasan Beg Rūmlū, *A chronicle of the early Ṣafawīs: being the Aḥsanu’l-Tawārīkh of Ḥasan-i-Rūmlū*, 2 vols., tr. C. N. Seddon, Baroda, 1931-1934.
- Qāzī Aḥmad Qumī, *Ḥulāṣat al-tawārīḥ*, ed. I. Iṣrāqī, 2 vols. Tehran, 1359-1362.
- Qāzī Aḥmad Qumī, *Die Chronik Ḥulāṣat at-tawārīḥ des Qāzī Aḥmad Qumī: Der Abschnitt über Schah ‘Abbās I*, ed. & tr. H. Müller, Wiesbaden, 1964.
- Qāzī Aḥmad Qumī, *Die frühen Safawiden nach Qāzī Aḥmad Qumī* (Islamkundliche Untersuchungen 5), tr. & ed. E. Glassen, Freiburg, 1970.
- Mahmūd b. Hidāyat Allāh Afūṣṭa’ī Naṭanzī, *Nuqāwat al-āṭār fī zikr al-aḥyār*, ed. I. Iṣrāqī, Tehran, 1971.
- Mullā Jalāl al-Dīn Munajjim Yazdī, *Tārīḥ-i ‘Abbāsī yā rūznāmah-yi Mullā Jalāl*, ed. S. Waḥīd-niyā, Tehran, 1366.
- Iskandar Beg Turkmān Munšī, *Tārīḥ-i ‘ālam-ārā-yi ‘Abbāsī*, 2 vols., ed. I. Afšār, Tehran, 1350.
- Iskandar Beg Turkmān Munšī, *History of Shah ‘Abbās the Great by Eskandar Beg Monshī*, 3 vols., tr. R. M. Savory, Colorado, 1978.
- Iskandar Beg Turkmān Munšī, *Zail-i Tārīḥ-i ‘ālam-ārā-yi ‘Abbāsī*, ed. A. Ḥwānsārī, Tehran, 1317.
- Fazlī Ḥūzānī Iṣfahān, *Afzal al-tawārīḥ*, II, India Office OR. 4678.
- ‘Abd al-Fattāḥ Fūmanī Gilānī, *Tārīḥ-i Gilān: dar waqā’i-yi sāl-hā-i 923-1038 hijrī qamarī*, ed. M. Sutūda, 1349.
- Mīrzā Ḥasan Beg Junābadī, *Rauzat al-Ṣafawīyah*, ed. Ġ. R. Ṭabāṭabā’ī, Tehran, 1378.
- Muḥammad Ma’šūm b. Ḥwājagī Iṣfahānī, *Ḥulāṣat al-siyar: Tārīḥ-i rūzgār-i Šāh Ṣafī Ṣafawī*, ed. I. Ahšār, Tehran, 1368.
- Muḥammad Ma’šūm b. Ḥwājagī Iṣfahānī, *Ḥulāṣat as-siyar: Der Iran unter Schah Ṣafī (1629-1642) nach der Chronik des Muḥammad Ma’šūm b. Ḥuāḏḡagī Iṣfahānī*, tr. G. Rettelbach, München, 1978.
- Mullā Kamāl b. Jalāl al-Dīn Munajjim Yazdī, *Zubdat al-tawārīḥ*, British Library, Or. 2060: Royal Asiatic Society, Morley 43.
- Muḥammad Ṭāhir Waḥīd Qazwīnī, *‘Abbās-nāmah yā šarḥ-i zindigānī-yi 22 sālīh-i Šāh ‘Abbās-i Ṭānī (1052-1073)*, ed. I. Dihgān, Arāk, 1329.
- Muḥammad Ṭāhir Waḥīd Qazwīnī, *Tārīḥ-i jahān-ārā-yi ‘Abbāsī*, ed. S. M. M. Šādiq,

- Tehran, 2005.
- Walī-Qulī b. Dāwūd-Qulī Šamlū, *Qiṣaṣ al-ḥāqānī*, 2 vols., ed. Ḥ. Sādāt-i Nāširī, Tehran, 1992-5.
- Muḥammad Yūsuf Wālih Iṣfahānī, *Rauzah-hā-yi šišum wa haftum az Ḥuld-i barīn: Tārīḥ-i Tīmūriyān wa Turkmānān*, ed. M. H. Muḥaddiṭ, Tehran, 2001.
- Muḥammad Yūsuf Wālih Iṣfahānī, *Ḥuld-i barīn*, ed. M. H. Muḥaddiṭ, Tehran, 1372.
- Muḥammad Yūsuf Wālih Iṣfahānī, *Īrān dar zabān-i Šāh Ṣaḥī wa Šāh ‘Abbās-i duwum (1038-1071 H. Q): Ḥuld-i barīn*, ed. M. R. Naširī, Tehran, 2001.
- Abu al-Faḏl, *The Akbar Nāma of Abu-l-Faḏl* (Bibliotheca Indica: A Collection of Oriental Works), 3 vols., tr. H. Beveridge, Delhi, 1902-1939 (reprint 1972-3).
- ‘Abd al-Qādir Badā’unī, *Muntakhab al-tawārīkh* (Bibliotheca Indica 51), 3 vols., III, Osnabrück (repr. of the edition Calcutta 1864-69), 1983. (略号: *Muntakhab*)
- Amīn Aḥmad Rāzī, *Tazkirah-i haft iqlīm*, 3 vols., Tehran, 1999.
- Ḥamd Allāh Mustaufī Qazwīnī, *Zafarnāma* (Doppelhandschrift: *Šāhnāma* von Firdausī), 2 vols., Tehran/Wien, 1999.
- Muḥammad Ṭāhir Naṣr-ābādī, *Tazkirah-i Naṣr-ābādī*, ed. Ḥ. V. Dastgardī, Tehran, 1317.
- Qāzī Aḥmad Gaffarī Qazwīnī, *Tārīḥ-i nigāristān*, ed. M. Mudarris-Gīlānī, Tehran, 1983/4.
- Qāzī Aḥmad Qumī, *Gulistān-i hunar*, ed. A. S. Ḥwānsārī, Tehran, 1366.
- Sām Mīrzā Ṣafawī, *Tazkirah-yi tuḥfa-yi Sāmī*, ed. R. Humāyūn-farruḥ, Elmi, n.d. (略号: *Tuḥfa*)
- Šāh Ṭahmāsb Ṣafawī, “Die Denkwürdigkeiten des Šāh Ṭahmāsp I von Persien”, P. Horn (ed.), *ZDMG* 44 (1890), pp. 563-649.
- , Minorsky, V. (tr.), *Tadhkirat Al-Mulūk: A Manual of Ṣafavid Administration*, Cambridge, 1943 (repr. 1980). (略号: *TM*)
- [文書史料]
- Busse, H. (ed.), *Untersuchungen zum islamischen Kanzleiwesen: an Hand turkmenischer und safawidischer Urkunden*, Kairo, 1959.
- Fekete, L. (ed.), *Einführung in die persische Paläographie: 101 persische Dokumente*, Budapest, 1977.
- Fragner, B., *Repertorium persischer Herrscherurkunden: Publierte Originalurkunden (bis 1848)*, Freiburg, 1980.
- Nawā’ī, ‘A. (ed.), *Šāh Ismā’il Ṣafawī: Majmū’ah-i asnād wa mukātibāt-i tāriḥī hamrāh bā yād-dāšt-hā-i tafsiṛī*, Tehran, 1368. (略号: *Ismā’il*)
- Nawā’ī, ‘A. (ed.), *Šāh Ṭahmāsb Ṣafawī: Majmū’ah-i asnād wa mukātibāt-i tāriḥī hamrāh bā yād-dāšt-hā-i tafsiṛī*, Tehran, 1368. (略号: *Ṭahmāsb*)
- Nawā’ī, ‘A. (ed.), *Šāh ‘Abbās: Majmū’ah-i asnād wa mukātibāt-i tāriḥī hamrāh bā yād-dāšt-hā-i tafsiṛī*, 3 vols., Tehran, 1367. (略号: *‘Abbās*)

- Papazjan, A. D. (ed.), *Persidskie dokumenty Matenadarana I: Ukazy, vypusk pervyj* (XV-XVI vv.), Eriwan, 1956.
- Papazjan, A. D. (ed.), *Persidskie dokumenty Matenadarana I: Ukazy, vypusk vtoroj* (1601-1650), Eriwan, 1956. (Papazjan, II)
- Sefatgol, M. (ed.), *Persian Historical Epistles from Iran and Mawara an-nahr: The Safavids, the Uzbeks, and the Mangits*, Tokyo, 2006.
- Schimkoreit, R., *Regesten publizierter safawidischer Herrscherurkunden: Erlasse und Staatsschreiben der frühen Neuzeit Irans*, Berlin, 1982.
- Ṭabāṭabā'ī, M. (ed.), *Bargī az tāriḫ-i Qazwīn: Tāriḫča-yi az āstānah-yi šāhzādah-yi Ḥusain wa dūdman-i sādāt-i Mar'asī-yi Qazwīn*, Qum, 1361.
- Zabiḥī, M. & Sutūdah, M., *Az Āstārā tā Astarābād*, 7 vols, VI, Tehran, 1354. (略号: *Āstārā*)
- [文書史料を含む参考文献]
- Afšār, I, “Ujrat-i kاتب wa silah-i kuttāb”, *Rāḥnamā-i kitāb* 10 (1346), 184-185.
- Aubin, J., “Un Soyurghal Qara-Quyunlu concernant le bulūk de Bawānāt-Harāt-Marwast”, in S. M. Stern (ed.), *Documents from Islamic Chanceries* (Oriental Studies III), Oxford, 1965, 159-170, 236-245.
- Dāniš-pažūh, M. T., “Du farmān-i marbūṭ bih šahr-i Rayy”, *Rāḥnamā-i kitāb* 7 (1343), 140-147.
- Dā'ūdī, Ḥ., “Asnād-i ḥāndān-i kalāntarī-yi Sīstān”, *Barrašt-hā-yi Tāriḫī*, 4: 5-6 (1348), 1-34.
- Deny, J., “Un soyurghal du Timouride Šāhruḫ: En écriture ouigoure”, *Journal Asiatique* 245 (1957), 253-266.
- Fragner, B., “Das Ardabil̄er Heiligtum in den Urkunden”, *WZKM* 67 (1975), 169-215.
- Fragner, B., “Farmān”, in E. Yarshater (ed.), *Encyclopaedia Iranica*, IX, 1999, 282-295.
- Gulzādī, M., “Čand sang-nivištah dar Asad-ābād-i Hamadān”, *Barrašt-hā-yi Tāriḫī* 10: 5 (1354), 219-230.
- Herrmann, G., “Zwei Erlasse Schah Ismā'īls I”, *Archaeologische Mitteilungen aus Iran* (Neue Folge) 19 (1986), 289-306.
- Herrmann, G., “Ein Erlaß Ṭahmāsp̄s I. von 934/1528”, *ZDMG* 139: 1 (1989), 104-119.
- Herrmann, G., *Persische Urkunden der Mongolenzeit*, Wiesbaden, 2004.
- Horst, H., “Ein Immunitätsdiplom Schah Muḥammad Ḥudābandās vom Jahre 989/1581”, *ZDMG* 105 (1955), 289-297.
- Horst, H., “Zwei Erlasse Šāh Tahmāsp̄s I”, *ZDMG* 110 (1961), 301-309.
- Hunarfār, L., *Ganjīnah-yi āṭār-i tāriḫī-yi Isfahān: āṭār-i bāstānī wa alwāḥ wa katībah-hā-yi tāriḫī dar ustān-i Isfahān*, Isfahan, 1350.
- Iqtidārī, A., “Farmānī az Šāh Ṭahmasb Šafawī dar bārah-yi šābūn-ḥānah-hā-yi Nīrūz”,

- Farhang-i Īrān-zamīn* 12 (1343), 319-322.
- Martin, B. G., "Seven Šafawid Documents from Azarbayjan", in S. M. Stern (ed.), *Documents from Islamic Chanceries* (Oriental Studies III), Oxford, 1965, 171-206, 246-254.
- Minorsky, V., "A Soyūlghāl of Qāsim b. Jahāngīr Aq-qoyunlu (903/1498) ", *BSOAS* 9 (1937-1939), 927-960.
- Mīr Abū al-Qāsimī, M. T., "Du farmān dar bārah-yi Ṭāliqān", *Farhang-i Īrān-zamīn* 12 (1343), 267-272.
- Mudarrisī Ṭabāṭabā'ī, H., *Turbat-i pākān: Āṭār wa banā-hā-yi qadīm-i maḥdūdah-i kunūnī-yi dār al-mu'minīn-yi Qum*, 2 vols, Qum, 2535. (略号: *Turbat*)
- Mufahḥam, M., "Farāmīn-i nau-yāftah az ḥāniwādah-yi Malik Šāh Nāzar: Sardār-i armanī-yi Šāh 'Abbās Šafawī", *Barrašt-hā-yi Tārīḥi* 12: 2 (2535), pp.41-86.
- Naḥjawānī, H. H., *Čihil maqālah tālif-i Ḥājj Ḥusain Naḥjawānī*, Y. Ḥādīm ed., Tabriz, 1343.
- Rabino di Borgomale, H. L., *Māzandarān and Astarābād* (Gibb Memorial Series 7), London, 1928.
- Simsār, M. H., "Farmān-niwīsī dar daurah-yi Šafawīyah: qismat-i duwwum", *Barrašt-hā-yi Tārīḥi* 3: 1 (1347), 61-83.
- 【その他の参考文献】
- , *Catalogue of Coins of the Shāhs of Persia in the British Museum*, London, 1887. (略号: *Catalogue*)
- Calmard, J., "Notes sur des Historiographes de l'époque safavide", *Studia Iranica* 16: 1 (1987), 123-124.
- Echraqi, E., "Le Kholāsat al-Tawāriḥ de Qāzi Ahmad connu sous le nom de Mir Mon-shi", *Studia Iranica* 4: 1 (1975), 73-89.
- Erdmann, F. v., "Iskender Munschi und sein Werk", *ZDMG* 15 (1861), 457-501.
- Hinz, W., "Eine neuentdeckte Quelle zur Geschichte Irans im 16. Jahrhundert", *ZDMG* 89 (1935), 315-328.
- Hoffmann, B., *Waqf im mongolischen Iran: Rašīduddīns Sorge um Nachruhm und Seelenheil* (Freiburger Islamstudien XX), Stuttgart, 2000.
- McChesney, R. D., "A Note on Iskandar Beg's Chronology", *Journal of Near Eastern Studies* 39: 1 (1980), 53-63.
- McChesney, R. D., "Four Sources of Shah 'Abbas's Building of Isfahan", *Muqarnas* 5 (1988), 103-134.
- Melville, Ch., "The Chinese-Uighur animal calendar in Persian Historiography of the Mongol period", *Iran* 32 (1994), 83-98.
- Melville, Ch., "A Lost Source for the Reign of Shah 'Abbas: the Afzal al-tawāriḥ of Fazli

- Khuzani Isfahani”, *Iranian Studies* 31: 2 (1998), 263-265.
- Melville, Ch., “New Light on the Reign of Shah ‘Abbās: Volume III of the Afzal al-tavārīkh”, in A. Newman(ed.), *Society and Culture in the Early Modern Middle East: Studies on Iran in the Safavid Period*. Leiden, 2003, 63-96.
- Melville, Ch., “Historiography IV. Mongol Period”, in E. Yarshater (ed.), *Encyclopaedia Iranica*, XII, 2004, 348-356.
- Morton, A. H., “An Introductory Note on a Ṣafawid Munshī’s Manual in the Library of the School of Oriental and African Studies”, *BSOAS* 33: 2 (1970), 352-358.
- Morton, A. H., “The Date and Attribution of the Ross Anonymous: Note on a Persian History of Shāh Ismā‘īl I”, in Ch. Melville (ed.), *Pembroke Papers I: Persian and Islamic Studies in Honour of P. W. Avery*, Cambridge, 1990, 179-212.
- Morton, A. H., “The Early Years of Shah Isma‘il in the Afzal al-tavārīkh and Elsewhere”, in Ch. Melville (ed.), *Safavid Persia: The History and Politics of an Islamic Society*, London, 1996, 27-51.
- Mossadegh, ‘A. A., “La Famille Monajjem Yazdi”, *Studia Iranica* 16: 1 (1987), 125-129.
- Quinn, S., “Notes on Timurid Legitimacy in Three Safavid Chronicles”, *Iranian Studies* 31: 2 (1998), 149-158.
- Quinn, S., *Historical Writing during the Reign of Shah ‘Abbas: Ideology, Imitation, and Legitimacy in Safavid Chronicles*, Salt Lake City, 2000.
- Quinn, S., “Historiography VI. Safavid Period”, in E. Yarshater (ed.), *Encyclopaedia Iranica*, XII, 2004, 363-367.
- Rodgers, C. J., *Coins of the Mogul Emperors of India*, Varanasi & Delhi, 1972.
- Rota, G., “Three Little-Known Persian Sources of the Seventeenth Century”, *Iranian Studies* 31: 2 (1998), 159-176.
- Savory, R. M., “Very Dull and Arduous Reading: A Reappraisal of the History of Shāh ‘Abbās the Great by Iskandar Beg Munshī”, *Hamdard Islamics*, III-1 (1980), 19-37.
- Savory, R. M., “Eskandar Beg Torkaman”, in E. Yarshater (ed.), *Encyclopaedia Iranica*, VIII, 602-603.
- Storey, C. A., *Persian Literature*, vol. 1. Part 1., London, 1970.
- M. Szuppe, “Historiography V. Timurid Period”, in E. Yarshater (ed.), *Encyclopaedia Iranica*, XII, 2004, 356-363.
- 近藤治「ムガル朝時代の文書行政」『ムガル朝インド史の研究』京都大学学術出版会, 2003, 319-356.
- 後藤裕加子「サファヴィー朝ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』61 (2004), 20-46.
- 後藤裕加子「宮廷儀礼としてのノウルーズ—16世紀後半サファヴィー朝宮廷とムガル朝宮廷の比較から」『人文論究 (関西学院大学人文学会)』55: 2(2005), 94-110.

羽田正「シャー・タフマースプのキジルバシ政策」『オリエント』30：2（1987），28-46.

that some people who only saw it as a method of speculation participated although the aim of the method had been to aid people in poverty, and thus it did not exhibit the elements of a development project conducted on a national scale.

Even though it is certainly true that the Hồng Đức banks ultimately made a great contribution to the development project, the development of rice fields here can be classified as of type (3). And despite this, the frequent acts of submitting reports from local officials, deliberations of the central government, the issuance of imperial decrees, surveys of villages by provincial authorities for the development of a single village can be seen as abuses brought about by the over concentration of power in the central government.

SAFAVID CHRONICLES AND THE INTRODUCTION OF THE TURKISH CALENDAR

GOTÔ Yukako

In Islamic historical writing the canonical Hijra calendar was ordinarily used to date historical events. In the area where Persian was the main written language of the inhabitants, historians began to write in Persian, but the Hijra calendar remained in use. After the Mongol invasion, the cyclical Chinese-Uighur calendar, in which the years were represented by a series of twelve animals, was introduced and used in parallel with the Hijra calendar in Persian historical writing and in dating the issuance of *fārmāns* (royal decrees).

After the fall of the Il-Khanid dynasty in the first half of the 14th century, the use of the solar animal calendar in Persian historiography became rare, even though it was still in use in administrative affairs. The Safavid dynasty, which had taken control of Persia in 1501, revived the use of the animal calendar, in the form of the Turkish calendar, *sāl-i turkī*. A special characteristic of this calendar is the conformity of New Year's Day with *naurūz* (New Year's Day) of Persian origin. Then in the later reign of Shah Tahmāsb I and that of Shah Sulṭān Muḥammad Ḥudābandah, most of the *fārmāns* that were issued between the late 960's (the early 1560's) and the late 990's (the late 1580's) had a corresponding animal-designated year in addition to a Hijra date. This period corresponds to the period when the Turkish calendar was given precedence over the Hijra dates in the Safavid chronicles, and both calendars were used in tandem. In the reign of 'Abbās I,

dates based on the coronation of the shahs were added to supplement the dates from the Turkish and Hijra calendars. These chronicles were written by *munšīs* (secretaries) who were in charge of drawing up *farmāns* with animal-designated years.

From this period onward the *naurūz* festival began to be celebrated in the Chihil-Sutūn palace in the capital Qazwīn and was established as an important ceremony of the royal court. The Safavids had struggled up to this point to escape the influence of the Qizilbāš tribes and construct a centralized government. The introduction of the Turkish calendar and the *naurūz* festival are aspects of a policy that sought to establish a strong Safavid kingship.